

食卓から がん予防

井藤久雄

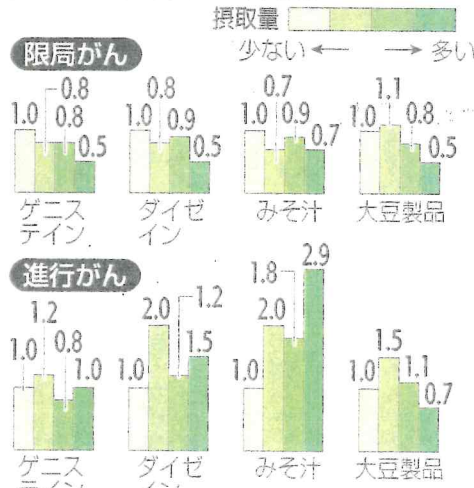
前立腺は男性ぼうこうの出口にあるクルミ大の臓器です。21世紀に入り、最も増加しているのは前立腺がんで、2018年の罹患数予測は7万8千人で、1995年の1万8千人に比較すると4・3倍。今後さらに増加することが予測されています。

幸い、男性のがんでは最も予後の良いがんであり、早期に発見すればほぼ100パーセント完治します。このため死亡率増加は1・8倍にとどまっています。前立腺がんは特異ながんです。60歳を超えて亡くなった人を病理解剖して前立腺を詳しく検査すると、生前に症状はなく、診断されていない前立腺がんが4人に1人程度の割合で見つかります。

これを「潜在がん」と言います。2003年1月に上皇さまが前立腺がんの手

大豆①

進展度別前立腺がんとイソフラボン摂取量の関係(61歳以上)



(国立がん研究センター調べ、2007年、がん疫学バイオマーカー予防雑誌に発表)

リスク高める一面も

術を受けられてから前立腺がんへの関心が高まり、血液検査や病理組織診断が飛躍的に増えました。潜在がんが発見されて、結果的に罹患率が高まった可能性があります。

国立がん研究センターは男性4万3千人(平均年齢40・69歳)を追跡調査し、07年に研究成果を発表した。この研究では、307人が前立腺がんと診断されていました。大豆イソフラボンであるゲニステインとダイゼイン、みそ汁、豆腐、納豆、油揚げなどの大

極論すれば、見つけなくてもいい前立腺がんが増えていることは否定できません。しかし、わが国で現実

に前立腺がんは増加しており、その原因として、高カロリー・高脂肪食、肥満

豆製品の摂取量を指標として前立腺がんの発生リスクを比較しました。前立腺がん全体と四つの指標との間に関連はありません。

そこで、前立腺内にとどまる限局がんに限って比較すると、ゲニステイン、ダイゼイン、大豆製品の摂取量が増加すると、前立腺がんの発生リスクが低下していました(図上)。しかし、前立腺外に浸潤する進行がんになると、むしろリスク

大豆製品の摂取量を指標としていません。進行した前立腺がんでは大豆イソフラボンと結び付くエストロゲン受容体が減少すること

が、前立腺がんに限らず、いろいろな臓器がんと関連しています。男女約2万人を12年間追跡して101人に肝がんが発生した研究(09年発表)では、興味深い結果が得られました。

国立がん研究センターは乳がん、前立腺がんに限らず、いろいろな臓器がんと大豆イソフラボンの関連を研究しています。男女約2万人を12年間追跡して101人に肝がんが発生した研究(09年発表)では、興味深い結果が得られました。

国立がん研究センターは乳がん、前立腺がんに限らず、いろいろな臓器がんと大豆イソフラボンの関連を研究しています。男女約2万人を12年間追跡して101人に肝がんが発生した研究(09年発表)では、興味深い結果が得られました。

が高くなる傾向があります(図下)。大豆製品は前立腺の潜在がんや限局がんが進行がんになる過程を抑制しているが、進行がんになるとリスクを高める可能性がありま

す。こうした関連は61歳以上の男性に限定すると、より明瞭でした。前立腺がんの進行度により大豆イソフラボンの効果が異なる仕組みは解明され

男性では大豆製品やイソフラボン摂取量と肝がん発生リスクに関連はありませ

【公益財団法人広島がんセンター理事】

【本日のメッセージ】
乳がん、女性の肝がん、進行性前立腺がんの患者さんは、大豆イソフラボンによりがん細胞が増殖する可能性があります。大豆製品の摂取に関して必ず主治医に相談してください。